

## 塚崎直樹著 『虹の断片 — 精神科臨床医、四八年の経験から —』 新泉社 (2021)

櫻本 洋樹 NTT 東日本伊豆病院\*

Tsukasaki Naoki, *A slice of rainbow*

: *What psychiatric clinicians think from 48 years of experience*

SAKURAMOTO Hiroki



本書は、長年にわたり精神科医療の現場に身を置いてこられ、本学会の発展にも多大な貢献をしてこられた塚崎直樹先生の四八年の歩みから紡ぎ出された書である。

本書の構成は次の通りである。

思い出すこと——はしがきにかえて

- 第一章 労働者の原型
  - 第二章 ハンセン病を手がかりとして
  - 第三章 精神鑑定をめぐる
  - 第四章 心理療法
  - 第五章 水俣病事件と向き合う
  - 第六章 病院改革
  - 第七章 自殺をめぐる
  - 第八章 鶴見俊輔とうつ病
- あとがき

導入にあたる「思い出すこと——はしがきにかえて」では、先生が医学生であった頃の思い出が語られる。若き日の先生は、物事というものがいかに見えない多様な繋がりにおいて現前しているか、知るという営みがいかに繊細で難しいことなのか、ということに思い至る。そして「一つの見方を選ぶということは、ヘッドラ

イトをつけて、洞窟に入るようなものだろう。首を動かせば、目の前が照らしだされて、はっきりと見ることができる。しかし、光の当たらない部分は、見えなくなってしまう。知ろうとすることは、逆に知り得ないことを造り出すことにつながる。では、どうすればよいのか、どうすべきなのか。その質問に少しでも答えをだそうと考えて、手探りしたのが、この本の内容だと思ってもらえれば、ありがたい」(p.19)と本書をはじめていく。

「第一章 労働者の原型」では、戦後の反戦運動、筑豊の廃鉱地帯の現実を描いた上野英信などから、私たちの仕事という営みの基底を支持している「仕事の手ざわり」(p.22)というものについて考えていく。先生は、この感覚を抜きにしては、思想というものは生産的になりえず、持続するものにもなりえないと述べる。そして「語った瞬間にそれは奪われてしまう」(p.45)ため、「語らずに伝える真実」(p.44)として、「語ることなく、伝えるべき人に伝えなければならない」(p.45)と述べる。言葉にすることは、生きられている経験を人目にさらすということでもある。それによって、救われることもあるだろう。とくに心理臨床とは、そのような営みだと思われる。しかし一方で、人に踏みにじられる可能性とも隣り合わせている。ユージン・T・ジェンドリンは、どんな意

\* hiroki.sakuramoto@east.ntt.co.jp  
NTT 東日本伊豆病院療養部臨床心理部門  
〒419-0193 静岡県田方郡函南町平井750

味も経験されてはじめて意味を持つ、と言う。「仕事の手ざわり」とは経験であり、ゆえに、仕事という営みに意味を与えるそもその源泉であると言える。その源泉がなければ、どんな仕事も形骸であろう。しかし、それを言葉にすることは、その源泉が人に奪われ、踏みにじられ、仕事という営みが破壊される危険性も伴っている。立場の弱い人たちにおいてはとくにそうであろう。語らず俯く人、語らず涙を流す人たちは、そうすることで、自分たちの大切なものを守ろうとしていると言えるのかもしれない。そのような人たちに触れるとき、私たちに、そこに秘められた真実を汲む責任が課せられている、ということなのかもしれない。

「第二章 ハンセン病を手がかりとして」では、病む体験の意味について考えていく。先生は、病む人が病の意味を問い、それを表現するという営みに近づくと、その人が置かれた歴史や社会のありよう、その営みを支え、光を当てた人たちの姿も見えてくると述べる。そして先生は、「私たちは、他人の行動の背景を知りつくすことはできない。そのことは自分自身にもあてはまる。自分の行動の理由をすべて理解しているわけではない。フロイトのいう無意識というレベルだけではなく、知り得ないものがある。知らずに動かされている。それほど自分自身のことがわかっているわけではない。しかし、見方を変えれば、自分たちの知らないうちに、何かによって支えられているものでもある」（p.89）と述べる。

「第三章 精神鑑定をめぐって」ならびに「第四章 心理療法」では、精神鑑定、そして心理療法が、破壊的なものとなる可能性について考えていく。対人援助に携わる人にとっては考えさせられる章かもしれない。先生は、「破壊的にならず、相手に接近していこうとするとき、そこに現れるものが、精神科医療という仕事の手ざわりだと感ずる」（p.142）と述べる。しかし、

それが現れるのは「一瞬のできごと」（p.142）であり、「その瞬間を維持しようとするれば、治療者は社会の重圧に耐えなければならなくなる」（p.142）と述べる。そのときの「仕事の手ざわり」の感覚それ自体はおそらく真なるものとして経験され、援助の源泉となっていたであろう。しかし、それを無理にとどめようとすると、援助者の欲望といった「不純な動機」（p.155）が混入したり、社会との軋轢が生じたりして、援助者、被援助者の双方に対して、破壊的に作用してしまうことがある、ということなのかもしれない。近年の心理臨床の動向を見ると、理論主義、技術主義の傾向が強まってきているように思われるが、そこには端的に、この章で述べられていることが現れているように感じられる。

「第五章 水俣病事件と向き合う」では、それに対して、人がどのように心を病み、どのように向き合ったかという視点から、水俣病事件について考えていく。先生は、物事は見えない多様な繋がりにおいて現前しているにもかかわらず、人、そして社会は、見えない多様な繋がりに対して眼差しを向けず、単一的な視点で捉えようとしているため、物事の全容がわからなくなっていると述べる。ともすれば、物事のある中心にあるのは出来事と思ひ込みがちだが、どんな物事も、そこに人がいるからこそ、その物事としてありえるのであり、そこから考えると、物事の中心にあるのは、人ということになる。それに対して、どのように心を病み、どのように向き合ったかという人の営みに視点を置くことで、その物事の全体に迫るという考え方は、本質的かつ人間的である。大きな事件ほど、複雑で見えない多様な繋がりにおいて現前していると思われるが、その大きさに反比例して、人が中心から排除され、単一的な視点で片付けられてしまっているように思われる。先生は、水俣病事件に関わった石牟礼道子、川本輝夫、緒方正人の生き方を挙げ、彼らは水俣病事件に関

わったことで、みずからの「存在を引きちぎられるような体験」(p.248)にさらされたと述べる。そして、「何らかの必然性や、運命的な力によって、関わりを避けることができない人間もいることだろう。そういう人間がいることによって、この世界は支えられているのである。人間存在とその社会の抱えている問題は、宗教的といつてよいほどの厳粛な姿勢を求めることがある。水俣病事件は、そのような問題であると思う」(p.248)と述べる。

「第六章 病院改革」では、精神科医療におけるかつての（と評者は思いたい）閉鎖拘禁的な入院治療と、その改革について考えていく。先生は、自身の取り組みにおいて、議論などを通じては、人も状況も変えられないのが現実である、ということに気づく。これは評者も痛感したことがある。力押しでは無理が生じる、無理なものは受容されない、受容されないので変わらない、という構図である。ではどうするか。先生は、患者の話を書くことから始める。物事を中心にいるのは患者であるから、その患者の話を書くことから始めるのは極めて自然である。当然と言えば当然だが、これをどれほど当然として実践している人がいるだろう。ここでも、物事を中心にいる人に戻っていくという先生の素朴で人間的な姿勢がうかがえる。先生は、「退院促進を打ちだすより、自然に退院を希望するように、退院が具体的な課題として求められるようにすることがまずは必要であった。そのためには、患者たちの自己評価をあげること、自尊心を取り戻すこと、現実的な選択肢があるということを示すことが問題だった。精神病院の改革とは、そこに入院している患者たちが、希望を見つけだすことだと考えた。そのためには、患者に関わる医療者が、希望を見つけださなくてはならない」(pp.274-275)と述べる。改革とは、まずはそれを志す援助者自身のうちにおいて取り組まれるべきもの、とい

うことなのかもしれない。本章を先生は次のような言葉で締めくくる。「制限され抑圧されているときは、こういう医療ではいけない、どこかに本当の医療の姿があるはずだというイメージがあった。それが、全体を動かしていると思えた。精神医療の閉鎖性や抑圧性が薄れてみると、その『本当のもの』という感覚も消えてしまっていることに気づく」(p.301)。しかし、それを無理にとどめようとしなないことが、おそらく大切なのであろう。

「第七章 自殺をめぐって」では、精神科医療の課題である自殺について考えていく。先生は精神科医になった当初、自殺未遂者に生きる意味などについて説いていたが、「その演説に感銘を受けた患者は一人もいない」(p.324)、「そのレベルで救われないからこそ、治療を求めるのだし、治療者を求めるのである。治療者が常識の世界に戻ってしまえば、その意味も乏しい」(p.324)とし、現在ではそのようなことはしなくなり、そばに黙っているだけで、語るべきこともあまりない、と述べる。そして、「『生まれてくるとき、とくに理由も考えずに生まれてきて、気がついたら生きていた。生きていくことに大して理由もいらぬのじゃないか。生きる理由を求めたら、その分、苦しくなるだけじゃないかなあ。まあ、何となく生きていけばよいのじゃないかなあ』。そんなことをつぶやく程度だろう」(p.324)と述べる。生誕とはそもそも受動的なものなのだから、何となく生きていてもよい。生きながら死んでいるようなときもあれば、死にながら生きていくようなときもある。諸富祥彦先生は「無境界」と述べておられるが、「何となく生きていけばよい」という言葉には、生きていくことも死んでいることもひとつの地続きになるような安心感がある。

「第八章 鶴見俊輔とうつ病」では、鶴見俊輔の人生とは、うつ病の再発を避けるという人生だったのではないかと、という視点から、鶴見

俊輔とうつ病について考えていく。先生は鶴見俊輔と個人的なお付き合いがあったとのことで、他の章とは雰囲気異なる。近くで見てこられた先生の語りだからか、不思議と身近に感じられる。そしてここでもやはり、人がいかに見えない多様な繋がりにおいて形作られているかが示唆されている。なかでも、家という存在の大きさを思い知らされる。そこで蒔かれる病の種の意味についても考えずにはいられない。先生は、鶴見俊輔が『思想の科学』の事務員であった女性の家に間借りしていたときに、自分の親との関係では得られなかった家庭的雰囲気を味わっていたことについて、「そこには癒やしの空間が存在していた。それだけ気持ちがよいということは、別の面からいうと、だれかのエネルギーを奪っているのである」（p.365）と述べる。奪われていたのは女性とその家族であったということは容易に想像される。そして、先生は、鶴見俊輔は奪うと同時に、「その女性の家族に受け入れられ、心から癒されたことの負債」（p.367）も背負うことになったと述べる。何かを得るときというのは、同時に、見えない多様な繋がりにおいて、どこかの、誰かの、何かを奪っているとき、ということなのかもしれない。ましてや、そこに心地よさがあるときは、なおのことかもしれない。奪われた人が得ようとするのを、責めることはできまい。しかし、奪われた人ほど、得ることは奪うことであることを知っており、罪悪感に苦しめられるように思われる。どのようにして救われるべきか。心理臨床に限らず、人という存在の課題が示されているように感じられる。なお、先生は、鶴見俊輔はこの「負債」を背負ったことによって、「自分の命を受け入れられるようになっていった」（p.367）と述べる。「負債」を清算せぬまま死ぬことは許されない。もし、鶴見俊輔がそのように思ったとしたら、鶴見俊輔は「負債」によって生かされたことになる。救いとは、それと

わからぬ姿で現れる、ということなのかもしれない。

「あとがき」では、先生の読者への願いがささやかに語られる。『虹の断片』という題名は、斎藤茂吉の歌「最上川の 上空にして 残れるは いまだうつくしき 虹の断片」からとったとのことである。「虹の断片」とは、いわば挫折した夢の残像である。人の数だけ「虹の断片」はあるだろう。また、同じ「虹の断片」を眺めているつもりでも、見え方は人の数だけあるだろう。「虹の断片」はやがて消え去るものだが、先生が「悔しさよりも、ある種の爽やかさがある」（p.426）と述べるように、むしろ清々した印象を受ける。本書は、厳しい現実に向き合い、倒れ、空に「虹の断片」を見た人たちへの、ささやかな慰めの書となっていたことに気づかされる。また、先生は本書を、「一つの物語としてまとめることをしなかった」（p.427）と述べるが、それは、私たちひとりひとりの「虹の断片」を切り捨てず尊重するための、先生の心遣いであったことにも気づかされる。しかし、先生が本書を、「その見かけとは別に、それぞれが影響し合い、共鳴していることを、感じ取ってもらえるのではないかと思っている」（pp.427-428）と述べるように、本書の全体を通底するものがあることも感じられる（評者は、本書の全体に、川の支流の、そのまた支流の、末端の干上がっている場所に、水を届けようとするようなイメージが浮かんだ）。先生は、「この本にまとまりのなさがあるとすれば、読者をその中に巻き込んで、読者の手で、なんらかの形で、そのまとまりを創り出して欲しいという呼びかけを含んでいる。この本は、一つの考えを手渡すものではない。むしろ、素材として読者に手渡したいというのが著者の願いである」（p.428）と本書を締めくくる。本書が多くの人に読まれ、読者ひとりひとりの心に、それぞれのまとまりが生み出されることを、評者も願う

次第である。なお、「思い出すこと——はしがきにかえて」において「ヘッドライト」の「質問」があったが、評者はこれを、いかに全体を照らすか、という問いなのだと思っていた。「一つの物語としてまとめることをしなかった」というのも、そのための手段なのだろうと思っていた。しかし、本書を読み進めるうちに、そうではないのではないかと感じた。全体を照らすというのはそもそも無理があるし、全体が隠れなく照らされてしまうというのも、それはそれで息苦しい。いかに全体を照らすかではなく、いかに照らされていないところに光を当てるか、あるいは、いかに照らされすぎているところに光を当てないか（陰を造るか）、ということを問うておられるのかもしれないと感じた。また、評者は本書に慰めを感じたが、慰められることは同時に、傷があらわにされる体験でもある。しかし、不快感はなく、むしろ心地よい。この心地よさはどこからくるのだろうと考えながら読んでいたのだが、先生の「仕事の手ざわり」からきているのかもしれないと感じた。これは「ヘッドライト」で言えば、「ヘッドライト」

を身につけるその人自身であり、先生という存在の生（なま）の体験性、神田橋條治先生が評しておられる「素の体験」に根ざしたところからくる慰めだからこそ、透明度が高く、心地よさを感じられるのかもしれないと感じた。先生の四八年の歩みのなかで研ぎ澄まされてきた臨床力の一端のようなものを垣間見た気がした。しかし、心地よく感じるときは、奪っているときであるということも、ゆめゆめ忘れてはなるまい。

以上、長くなってしまったが、ここで本稿を閉じさせて頂きたい。

本書を書評としてまとめてしまうことは、余計な味付けをしてしまうことになり、先生の願いに反することになるかもしれない。しかし、本書の魅力を少しでもお伝えしたい。その矛盾を少しでも緩和するにはどうすればよいのか。それを考え、本稿は書評というより、紹介のような立ち位置をとらせて頂いた。先生が手渡してくれた素材の魅力を少しでも損なわずにお伝えできていたら、望外の喜びである。